

体育授業における困難さを解決する方法

一特別支援学校(知的障害)小学部教師を対象に一

須田 桂子

菅野 和恵 東海大学健康学部

要 旨：特別支援学校(知的障害)小学部教師が、体育授業において抱える困難さの解決方法を明らかにすることを目的とした。12校 250名を対象に、自記式質問紙調査を実施した。有効回答は、188名であった(回収率 75.2%)。体育授業において抱える困難さの高低により対象者を2群にわけ、現在の解決方法と今後希望する解決に関する得点を比較した。その結果、現在の解決方法について、困難さが低い群は、「専門書・雑誌を読んで勉強する」「示範ができるようになるため、自主的に練習する」「他校の先生に相談する」「地区の研究会に参加する」の得点が高いことが示された。体育授業に関する困難さが少ない教師は、自ら知識を求めて勉強をしたり、相談をしたりすることや、身近な研究会に参加していることが明らかになった。教員同士のつながりが解決の手立てとなっていることは、特別支援学校における教師の現職研修を検討する上で、重要な示唆となろう。

Key Words： 教師，知的障害，体育，小学部，特別支援学校

I. 問題の所在と目的

知的障害児の運動に関しては、幼児期における運動技能と知的能力(落合, 1983)⁶⁾、模倣や身体イメージ(田辺・田村, 1988, 1989)⁹⁾¹⁰⁾、ダウン症や自閉症など障害種類別の運動発達(是枝・小林・太田, 2004³⁾; 橋本・菅野・細川・渡邊, 2008¹⁾; 奥住, 2005⁷⁾; 矢部・三田・青木・西村・水野・若林, 1979¹¹⁾等)に関する研究がなされている。しかし、知的障害のある児童生徒に対して、教師が体育をどのように指導するのかといった、体育授業に関する研究は少ない。特に、小学校段階における、特別支援学校教師の体育指導に関する研究は見当たらない。

須田・菅野(2015)⁸⁾は、特別支援学校小学部の体育授業に関して、教師の抱く困難さという観点から検討した。因子分析の結果、「子どもの実態把握・授業づくり」「単元の指導・教材知識」「複数担任・指導場所」「施設利用・準備」の4因子が抽出されたことを報告した。特別支援学校小学部の教師は、体育授業において、

「子どもの実態把握・授業づくり」と「単元の指導・教材知識」について困難を抱えていることが認められている。

授業づくりや単元の指導に関して、学習指導要領が改定され、特別支援学校小学部各教科についても目標と内容が示されたり(文部科学省, 2018a)⁴⁾、特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編(文部科学省, 2018b)⁵⁾において各教科の目標内容がわかりやすく示されたりした。しかし、目標内容が具体的に示されたが、日々の教育実践を行う教師は、単元設定や指導計画、授業の組み立てなどに悩んだり、模索したりしていることが続いていると考えられる。

そこで、本研究は、須田・菅野(2015)⁸⁾に引き続き、体育授業に困難さをもつ特別支援学校小学部の教師が、それをどのように解決しようとしているのかについて明らかにする。具体的には、現在の解決方法、ならびに今後希望する解決方法について検討する。特別支援学校の教師が、体育授業の困難さを解決する方法を明らかにすることは、現職研修の方法や内容を検討する一助となると考えられる。

II. 方法

1. 対象者

関東地方の特別支援学校(知的障害)小学部12校, 教員250名を対象にし, 有効回答は188名であった(回収率75.2%).

2. 期間

2012年6月から8月にかけて質問紙調査を行った。

3. 質問紙について

(1) 質問紙の作成(予備調査)

体育の授業における困難さの解決方法について加登本・松田・木原・岩田・徳永・林・村井・嘉数(2011)²⁾の項目をもとに修正した質問項目を作成し, 特別支援学校(知的障害)小学部担当経験を有する4名(男女各2名)に質問紙の内容について妥当かどうか検討を依頼した。その結果, 具体的な文章への修正や特別支援学校の実態にかかわる項目についての修正や追加があった。

(2) 質問紙の構成

予備調査の結果をもとに大学生, 大学院生(現職教員2名を含む)7名, 大学教員1名で本調査に用いる質問項目を検討した。その結果, 本調査で用いる質問項目は, 現在の解決方法, 今後希望する解決方法について各13項目の構成となった。

回答は5件法で求めた。現在の解決方法は「1. まったくそうしていない, 2. そうしていない, 3. どちらでもない, 4. そうしている, 5. よくそうしている」である。今後希望する解決方法には, 「1. まったくそうしたいとは思わない, 2. そうしたいとは思わない, 3. どちらでもない, 4. そうしたい, 5. とてもそうしたい」である。それぞれに自由記述の欄も設けた。

4. 手続き

質問紙の配布が可能な学校を事前に確認し, 配布可能と回答した学校に郵送もしくは訪問して教師への配布を依頼した。回収は, 郵送もしくは訪問して行った。

5. 分析方法

須田・菅野(2015)⁸⁾による, 特別支援学校(知的障害)小学部教師の体育授業における困難さの研究結果に基づき, 対象者を2群にわけた。

具体的には, 須田・菅野(2015)⁸⁾の特別支援学校小学部教師の体育指導における困難さの質問紙に関する全項目の平均得点を算出し(M=2.96点 SD=0.61), 平均より低い群と平均点以上の2つの群に分けた。その上で, 現在の解決方法と今後希望する解決方法の各13項目について, 得点を群間比較した。

また, 自由記述に関しては, 記述を短文にわけ, 類似した内容ごとにカテゴリを作成した。

6. 倫理的配慮

依頼文書において, 匿名の回答であること, 回答するかどうかは自由であること, 研究以外の目的で使用しないこと, 結果の公表において個人及び個人の職場が特定されないように十分配慮することなどを明記した。切手を貼った返信用封筒に質問紙を入れて配布し, 回収においても匿名性を保てるよう配慮した。

III. 結果

1. 現在の解決方法, 今後希望する解決方法

まず, 体育指導における困難さの質問紙結果(須田・菅野, 2015)⁸⁾に基づき, 平均値より低い群(以後, 困難度低群)と平均値より高い群(以後困難度高群)に分けた。それぞれのグループの年齢や免許状, 経験年数などの属性について集計した(Table 1)。

次に, 困難度低群と困難度高群の個人属性の特徴を相対的に捉えるために, χ^2 検定を実施した。その結果, 年齢($\chi^2(3)=8.216, p<.05$), 特別支援学校教員免許の有無($\chi^2(1)=4.157, p<.05$), 中学校教員免許状保健体育の有無($\chi^2(1)=6.684, p<.01$), 教員経験年数($\chi^2(2)=9.523, p<.01$), 小学部担任経験年数($\chi^2(2)=9.116, p<.05$)において, 人数の偏りが有意であった。年齢においては, 20代においては困難度が高い教師が多く, 50代においては困難度の低い教師が多いことがわかった。保有免許状に関しては, 特別支援学校教員免許のある教師および中学校教員免許(保健体育)がある教師においては, 困難度が低い者が多いことが明らかになった。教員経験年数および小学部担任経験年数においては, 1~5年目においては困難度が高い教師が多く, 11年以上においては困難度が低い教師が多いことがわかった。

さらに, 困難度低群と困難度高群における現在の解決方法について, 各項目の得点を従属変

数とした一要因分散分析を行った。

その結果、「2. 専門書・雑誌を読んで勉強する。」(F(1,186) = 4.53, p<.05), 「5. 他校の先生に相談する。」(F(1,186) = 4.87, p<.05), 「6. 地区の研究会に参加する。」(F(1,185) = 5.02, p<.05) 「13. 示範ができるようになるため、自主的に練習する。」(F(1,181) = 6.40, p<.05)に有意な差が見られた。困難度低群の教師は、困難度高群の教師より「2. 専門書・雑誌を読んで勉強する。」「5. 他校の先生に相談する。」「6. 地区の研究会に参加する。」「13.

示範ができるようになるため、自主的に練習する。」の項目において得点が高かった(Table 2)。

また、困難度低群と困難度高群における今後希望する解決方法について、各項目の得点を従属変数とした一要因分散分析を行った。

その結果、「8. 教員養成系大学で行われる各種の講習会等に参加する。」(F(1,183) = 6.085, p<.05)に有意な差が見られた。困難度高群の教師は、困難度低群の教師より「8. 教員養成系大学で行われる各種の講習会等に参加する。」の項目において得点が高かった(Table 3)。

Table 1 困難度低群と困難度高群の個人属性 (①年齢、②性別、③保有免許状 等)

	困難度の低い群 困難度低群		困難度の高い群 困難度高群		χ ² 値
	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)	
①年齢(N=188)					
20代(N=54)	20	37	34	63	x ² (3)=8.216*
30代(N=53)	25	47.2	28	52.8	
40代(N=48)	27	56.3	21	43.8	
50代(N=33)	22	66.7	11	33.3	
②性別(N=169)					
男性(N=52)	25	48.1	27	51.9	x ² (1)=0.048
女性(N=117)	60	51.3	57	48.7	
③保有免許状					
A. 小学校免許					
小学校免許有(N=158)	80	50.6	78	49.4	x ² (1)=0.040
小学校免許無(N=30)	14	46.7	16	53.3	
B. 特別支援学校免許(N=188)					
特別支援学校有(N=152)	82	53.9	70	46.1	x ² (1)=4.157*
特別支援学校無(N=36)	12	33.3	24	66.7	
C. 中学校免許					
中学校免許保健体育有(N=18)	14	77.8	4	22.2	x ² (1)=6.684**
中学校保健体育外免許有(N=81)	33	40.7	48	59.3	
D. 高等学校免許					
高等学校免許保健体育有(N=17)	12	70.6	5	29.4	x ² (1)= 2.827
高等学校保健体育外免許有(N=68)	30	44.1	38	55.9	
④教員経験年数					
1~5年目(N=60)	22	36.7	38	63.3	
6~10年目(N=41)	18	43.9	23	56.1	x ² (2)=9.523**
11年以上~(N=86)	53	61.6	33	38.4	
⑤小学部担任経験年数					
1~5年目(N=105)	43	41	62	59	
6~10年目(N=34)	18	52.9	16	47.1	x ² (2)=9.116*
11年以上~(N=46)	31	67.4	15	32.6	
⑥小学部体育担当経験年数					
1~5年目(N=101)	52	51.5	49	48.5	
6~10年目(N=14)	7	50	7	50	x ² (3)=3.884
11年以上~(N=20)	13	65	7	35	
無(N=50)	20	40	30	60	
⑦担任学年					
1年(N=33)	15	45.5	18	54.5	
2年(N=30)	14	46.7	16	53.3	
3年(N=27)	12	44.4	15	55.6	x ² (5)=3.853
4年(N=32)	18	56.2	14	43.8	
5年(N=32)	18	56.2	14	43.8	
6年(N=26)	17	65.4	9	34.6	
⑧体育授業担当の有無					
今年度の授業担当有(N=92)	47	51.1	45	48.9	x ² (1)=0.138
今年度の授業担当無(N=91)	43	47.3	48	52.7	

p<.05 * p<.01 **

2. 現在の解決方法に関する自由記述について

Table 4 に示したカテゴリが作成された。大カテゴリは、「研修会への参加状況」、「自主的な勉強」、「体調管理」、「具体的な研修希望」に分かれた。「研修会への参加状況」は、研修会に参加する時間をとることは難しいことや、体育の研修は受けていないことが示されていた。「自主的な勉強」は、自主的に勉強会に参加しなければと感じるというものであった。体調に気を付けていることや、専門家による指導を定期的に受けたいといった回答もあった。

3. 今後希望する解決方法に関する自由記述について

Table 5 に示したカテゴリが作成された。大カテゴリは、「研修会への参加状況」、「自主的な勉強」に分かれた。「研修会への参加状況」については、常に研修の必要性は感じていることや、平日に加え長期休業中も研修参加が難しいことが示されていた。「自主的な勉強」は、自ら勉強機会を設定していることや、必要に迫られれば自主的な勉強会を行う考えがあることが示されていた。

Table 2 現在の解決方法（困難さからの比較）

番号	項目	困難度の低い群		困難度の高い群	
		困難度低群		困難度高群	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
		M	SD	M	SD
1.	校内の同僚の先生に相談する。	4.12	0.64	4.03	0.60
2.	専門書・雑誌を読んで勉強する。	3.54*	0.84	3.26*	1.01
3.	インターネットのホームページや質問コーナー等を利用する。	2.94	1.07	2.81	0.99
4.	教育委員会主催の研修会・講習会に参加する。	2.39	0.88	2.16	0.89
5.	他校の先生に相談する。	2.83*	1.13	2.47*	1.11
6.	地区の研究会に参加する。	2.21*	0.85	1.95*	0.77
7.	研究指定校の研究会に参加する。	2.05	0.80	1.94	0.79
8.	教員養成系大学で行われる各種の講習会等に参加する。	1.91	0.78	1.94	0.79
9.	教員養成系大学の附属学校が行う公開研究会や研修会に参加する。	1.96	0.78	1.95	0.87
10.	自主的な勉強会に参加する。	2.39	1.00	2.18	0.97
11.	民間の研修会・講習会等に参加する。	2.31	1.04	2.06	0.98
12.	教職大学院や大学院で専修免許を取得する。	1.78	0.74	1.63	0.70
13.	示範ができるようになるため、自主的に練習する。 (例. 家で練習する。スミミングに通う。等)	3.03*	1.07	2.63*	1.07

$p < .05^*$

Table 3 今後希望する解決方法（困難さからの比較）

番号	項目	困難度の低い群		困難度の高い群	
		困難度低群		困難度高群	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
		M	SD	M	SD
1.	校内の同僚の先生に相談する。	4.23	0.60	4.24	0.62
2.	専門書・雑誌を読んで勉強する。	3.97	0.77	3.92	0.73
3.	インターネットのホームページや質問コーナー等を利用する。	3.41	1.10	3.56	0.90
4.	教育委員会主催の研修会・講習会に参加する。	3.23	0.96	3.29	0.86
5.	他校の先生に相談する。	3.42	0.99	3.40	0.85
6.	地区の研究会に参加する。	2.95	0.90	3.13	0.86
7.	研究指定校の研究会に参加する。	3.05	0.92	3.28	0.87
8.	教員養成系大学で行われる各種の講習会等に参加する。	2.91*	0.95	3.23*	0.82
9.	教員養成系大学の附属学校が行う公開研究会や研修会に参加する。	2.98	0.99	3.22	0.87
10.	自主的な勉強会に参加する。	3.34	0.96	3.27	0.89
11.	民間の研修会・講習会等に参加する。	3.19	0.97	3.22	0.86
12.	教職大学院や大学院で専修免許を取得する。	2.29	1.03	2.48	1.02
13.	示範ができるようになるため、自主的に練習する。 (例. 家で練習する。スミミングに通う。等)	3.65	0.88	3.45	1.06

$p < .05^*$

IV. 考察

体育授業における困難さの程度によって、対象者を二つのグループにわけ、個人属性を比較した。その結果、経験年数と教員免許の有無により、困難さに違いがあることがわかった。経験年数については、経験が長い教師は困難さを感じる事が少なかった。また、特別支援学校教員免許状、ならびに中学校免許状(保健体育)を保有する教師も、困難さを感じる事が少なかった。この結果を踏まえると、体育授業における困難さは、経験を重ねることによって少なくなることや、免許状があることと関連することがわかった。免許状に関しては、特別支援教育や体育教科に関わる知識、免許取得にあたって実習をした経験、ならびに免許に関わる勉強会や研修会に参加することが、困難さをもつことに影響していることが示唆された。

困難さに関する現在の解決方法について困難度が低い教師は、専門書を読んだり、研究会に参加したり、他校の先生に相談したりする方法を、積極的に用いていることが示された。困難さを解決するためのアプローチ方法は多様であるが、自分自身で教材研究を深めることや、教員間のつながりやネットワークを駆使しながら教材研究を深める方法をとっていることがわかった。

四方田ら(2013)¹²⁾は、授業力量向上の意欲が、自ら情報や支援を求めて研修への参加や他教

師との関係を強め、学習機会を増大させている行動と関連していることを報告している。本研究で示された困難度の低い教師を、四方田ら(2013)¹²⁾をふまえて捉えようとする、授業力量向上の意欲が高い教師であると言える。

一方、本研究で困難度が低い教師は、教員経験が長く、特別支援教育や体育に関する免許状を保有する教師であったことをかんがみると、経験や知識が教材研究への取り組みやすさにつながっているとも考えられる。これらをまとめると、困難さの解決には授業力量向上への意欲を持つことや教材研究を深めることを促進することが重要であることが示唆された。

困難さに関する今後希望する解決方法について、困難度が高い教師は教員養成系大学に特別支援学校小学部体育に関する研修会を期待していることが明らかになった。また、教師の困難度の高さは、年齢が若く経験年数が少ないこと、ならびに特別支援学校や保健体育免許状をもたないことと関わる。教員養成系大学においては、今後の特別支援学校小学部体育に関する研修会について、年齢や経験年数、保有免許状等の対象者を考慮した研修会の開催が期待される。

また、自由記述においては、研修会に参加を希望し、必要性を感じてはいるものの、たとえ長期休みであっても参加の難しさを感じている教師がいることがわかった。研修会に参加したり勉強会を企画したりする時間や体制を整

Table 4 現在の解決方法に関する自由記述

カテゴリ	内容
研修会への参加状況	<ul style="list-style-type: none"> ・研修会に参加できる回数、時間をとることは、現状としてきびしい。 ・他の研修を優先させている。 ・他の教科や自閉症などの障害については、専門的に学んでいる(2)。 ・体育の研修は受けていない。考えていない(3)。
自主的な勉強	<ul style="list-style-type: none"> ・自主的に勉強会等に参加しなければと感じる。
体調管理	<ul style="list-style-type: none"> ・体調に気をつけている。
具体的な研修希望	<ul style="list-style-type: none"> ・専門家による指導を定期的に受けられるようにしてほしい。

()内は、人数

Table 5 今後希望する解決方法に関する自由記述

	内容
研修会への参加状況	<ul style="list-style-type: none"> ・平日の研究会は、体制の上でむずかしい。 ・長期休業中もプール指導、校外、研修で研究会への日程調整は、難しいことが多い。 ・常に研修の必要性を感じている。
自主的な勉強	<ul style="list-style-type: none"> ・専科の先生に指導の相談をしている。リーダーシップをとる先生がいなくなったら考える。 ・プールで泳いだりはしています。時々。

備することに加え、出前形式での研修会の実施や、スカイプやビデオ会議システムなどを活用した研修も、期待されよう。



V. 今後の課題

体育授業に関する困難さが少ない教師は、自ら知識を求めて勉強をしたり相談をしたりすることや身近な研究会に参加していることが明らかになった。自校であれ他校であれ、教師同士のつながりが解決の手立てとなっていることは、特別支援学校における教師の現職研修を検討するうえで重要であろう。経験年数によって困難さが異なることを踏まえると、教師間における年代を超えた交流が求められ、年代間での体育授業における知識や技術の伝承が必要であろう。

謝 辞

今回の研究を行うにあたって調査用紙の配布にご協力いただきました管理職の方々、お忙しいところお時間を作って回答していただいた先生方に感謝いたします。また予備調査にご協力いただいた先生方、および、研究室の皆さんにお礼申し上げます。

文 献

- 1)橋本創一・菅野敦・細川かおり・渡邊貴裕(2008):ダウン症者の基礎的運動能力に関する横断的研究. 発達障害研究, 30(1), 39-51.
- 2)加登本仁・松田泰定・木原成一朗・岩田昌太郎・徳永隆治・林俊雄・村井潤・嘉数健悟(2011):体育授業の悩み事に関する調査研究(その2)―悩み事の解決方法を中心として―. 学校教育実践学研究, 17, 169-174.
- 3)是枝喜代治・小林芳文・太田昌孝(2004):自閉症児の運動模倣能力の特性. 発達障害研究, 25(4), 265-279.
- 4)文部科学省(2018a):特別支援学校幼稚部教育要領特別支援学校小学部・中学部学習指導要領平成29年4月告示. 海文堂出版.
- 5)文部科学省(2018b):特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編(幼稚部・小学部・中学部)平成30年3月. 開隆堂出版.
- 6)落合優(1983):幼児の運動技能と知的能力. 体育の科学, 33(2), 117-120.
- 7)奥住秀之(2005):知的障害者の運動行為の問題. 発達障害研究, 27(1), 13-19.
- 8)須田桂子・菅野和恵(2015):特別支援学校(知的障害)小学部教師の体育授業における困難さの検討―小学部教師を対象に行った調査から―. 障害科学研究, 39, 53-64.
- 9)田辺正友・田村浩子(1988):精神遅滞児の身体運動模倣の発達―モデルの視覚的要因および運動形態からのアプローチ―. 特殊教育学研究, 26, 43-52.
- 10)田辺正友・田村浩子(1989):精神遅滞児のボディ・イメージの発達. 奈良教育大学紀要, 38(1), 83-92.
- 11)矢部京之助・三田勝己・青木久・西村辨作・水野真由美・若林慎一郎(1979):精神遅滞児と自閉症児の体力・運動能力. 体育の科学, 29(10), 740-743.
- 12)四方田健二・須甲理生・荻原朋子・浜上洋平・宮崎明世・三木ひろみ・長谷川悦示・岡出美則(2013):小学校教師の体育授業に対するコミットメントを促す要因の質的研究. 体育学研究, 58(1), 45-60.

(受稿 2019.2.20, 受理 2020.1.6)